

**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* 校訂テキスト及び試訳（２）

佐藤 晃

１．はじめに

本稿は、９紀頃に活躍したと想定されるジュニャーナキールティ（*Jñānakīrti, Ye shes grags pa）の**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa*（PYBhKrU, 『波羅蜜乗修習次第説示』）の校訂テキスト及び試訳を提示するものである。筆者は、既にその一部を発表（「**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* 校訂テキスト及び試訳（１）」本誌第 24 号）しているが、本稿ではその続きの箇所を取り上げる。なお、PYBhKrU に関しては既に前号において概説しているので、本稿では重複を避けるため割愛する。また【凡例】についても前号を参照されたい。

PYBhKrU 全体を概観できるように、現段階でのシノプシスを前号同様に示しておく。箇所情報については、便宜上 D¹（デルゲ版 No. 3922）の箇所情報のみを提示する。本稿で扱う箇所には、二重下線を付してある。

【**Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa* シノプシス】

（※シノプシス中、二重下線を付した箇所が本稿で扱う箇所となる）

§1. 序	D ¹ 72b4
§2. 菩提心	D ¹ 73a5
§2.1. 誓願心と発趣心	D ¹ 73a5
§2.1.1. 誓願心と発趣心	D ¹ 73a5
§2.1.2. 三種類の誓願心と十九種類の発趣心	D ¹ 73a7
§2.1.2.1. 三種類の誓願心	D ¹ 73b1
§2.1.2.2. 十九種類の発趣心	D ¹ 73b4
§2.2. 各菩提心と修行階梯	D ¹ 73b5

§2.3. 誓願心と発趣心の定義	D ¹	73b7
§3. 実践	D ¹	74a2
§3.1. 智慧——止観双運道——	D ¹	74a3
§3.1.1. 止	D ¹	74a3
§3.1.1.1. 止の資糧	D ¹	74a4
§3.1.1.2. 止の対象	D ¹	74a5
§3.1.1.3. 止の過程	D ¹	74a6
§3.1.1.3.1. 貪欲を鎮める——九想観——	D ¹	74b1
§3.1.1.3.2. 瞋恚を鎮める——慈悲観——	D ¹	74b5
§3.1.1.3.3. 愚癡を鎮める——縁起観——	D ¹	74b5
§3.1.1.3.4. 対象に対する不満足を鎮める	D ¹	74b6
§3.1.1.3.5. 昏沈と掉挙を鎮める	D ¹	74b6
§3.1.1.3.6. 六過失と八断行	D ¹	75a2
§3.1.1.3.7. 九種心住	D ¹	75b1
§3.1.1.4. 止の完成	D ¹	76b6
§3.1.2. 観	D ¹	75b7
§3.1.3. 止観双運道の果報	D ¹	76a4
§3.1.3.1. 断惑	D ¹	76a4
§3.1.3.2. 智慧の完成——智慧波羅蜜——	D ¹	76a7
§3.2. 方便と智慧の併修	D ¹	76b3
§3.2.1. 方便の定義	D ¹	76b5
§3.2.2. 智慧の定義	D ¹	76b5
§3.2.3. 方便と智慧の併修	D ¹	77a1
§3.2.4. 方便と智慧の併修による果報	D ¹	77a5
§4. 奥書	D ¹	77b2

本稿では、上記シノプシスの「§2.1.2.1. 三種類の誓願心」から「§2.3. 誓願心と発趣心の定義」までの箇所を扱う。以下、そこで論じられる内容を概説する。

既に佐藤[2015]で「§2. 菩提心」に入っているが、本稿で扱う内容はその後半に当たる。PYBhKrU では、菩提心をまずは誓願心（菩提への希求を相とする心）と発趣心（布施等の資糧獲得へ邁進することを相と

する心⁽¹⁾の二種類に分類し⁽²⁾、その上で、誓願心を三種類に、発趣心を十九種類に分類する。したがって、菩提心は最終的には二十二種類に分類されることになる⁽³⁾。本稿で扱う「§2.1.2.1. 三種類の誓願心」と「§2.1.2.2. 十九種類の発趣心」では、それら二十二種類の各菩提心の解説が為される。その解説では、①各菩提心が特定の事柄を伴っている点が指摘され、②それぞれの菩提心の在り方に関する譬喩が挙げられる。そして「§2.2. 各菩提心と修行階梯」では、③各菩提心が修行階梯の如何なる段階と対応しているのか、その対応付けが示される。

ジュニャーナキールティは、菩提心を二十二種類に分類するに当たり、各菩提心に対応する譬喩を列挙する *Abhisamayālaṃkāra* (AA) I.19–20 を引用する。彼が引用する AA は、上記の③修行階梯との対応関係については言及しない。その対応付けは、ハリバドラ (ca. 8c. 後半) の *Abhisamayālaṃkāraloka* (AAĀ) 等に確認され、ジュニャーナキールティはそれらを参照したのではないかと推測される⁽⁴⁾。以下、二十二種類の菩提心をそれぞれの特徴と共に列挙するが、PYBhKrU の記述は簡潔であるため、AAĀ の解説も踏まえて記述する（なお、ここでは、参照した AAĀ の情報は省略する。それについては試訳（本稿 2.）に付した注を参照されたい）。

まず三種類の誓願心は、①意欲 (*chanda) を伴う、仏のあらゆる特性をありのままに悟ることへの願望を在り方とする誓願心、②意志 (意樂, *āśaya) を伴った、六波羅蜜を在り方とする誓願心、③より優れた意志 (勝意樂, *adhyāśaya) を伴う、三十七菩提分法の修習に対する願望を在り方とする誓願心の三種類である。そして、発趣心に関しては、④加行 (*prayoga)、⑤ – ⑭布施等の十波羅蜜 (*daśapāramitā)、⑮神通 (*abhijñā)、⑯福德と知の二資糧 (*puṇyajñānasambhāra)、⑰三十七菩提分法 (*bodhipakṣa)、⑱止観 (*śamathavipaśyanā)、⑲総持弁才 (*dhāraṇīpratibhāna)、⑳法印 (*dharmoddhāna)、㉑一乗なる道 (*ekayānamārga)、㉒法身 (*dharmakāya) という十九種類の事柄を伴う発趣心が列挙される。

では、以上の各菩提心は、修行階梯の如何なる段階と対応付けられるのであろうか。まず三種類の誓願心は、初習業位（資糧位）に配当される。AAĀ によれば、その三種類はさらに下、中、上に分けられる。十

九種類の発趣心は、第四の菩提心は順決択分位（加行道／信解行地）に、第五から第十四の菩提心は因位に、残りの八種類は果位に配当される。ハリバドラは、果位をさらに三段階に分ける。第十五から第十九の菩提心は菩薩地における勝進道に、第二十の菩提心は仏地に入るための加行道に、最後の第二十一と第二十二の二種類は仏地に配当される。

		各菩提心と結び付く事柄	修行階梯	
誓願心	①	意欲	下	初習業位 (資糧地)
	②	意楽	中	
	③	勝意楽	上	
発趣心	④	加行	順決択分位 (加行道／信解行地)	
	⑤—⑭	十波羅蜜	因位 (見道・修道／十地)	
	⑮—⑲	神通・福德と知の二資糧・三十七菩提分法・止観・総持弁才	菩薩地・勝進道	果位
	⑳	法印	菩薩地・加行道	
	㉑	一乗道	仏地	
	㉒	法身		

以上のようにジュニャーナキールティは、菩提心をまず二種類（誓願心と発趣心）に分け、さらに誓願心を三種類に、発趣心を十九種類に分類するという議論を用いる。そして、各菩提心は修行者が至った特定の修行段階を示し、修行を通して修行者の「菩提心」が質的に変容していくことが示されている。

既に佐藤 [2015]で述べた通り、PYBhKrU は、カマラシーラの *Bhāvanākrama-I* (BhKr-I)に基本的には依拠している。しかし、本稿で見られる菩提心の議論はそうではない。誓願心と発趣心という二種類への分類までは BhKr-I でも確認されるが、その下位分類、そして、修行階梯との対応付けは BhKr-I では確認されない⁽⁵⁾。それらは瑜伽行唯識学派に分類される AA 系統（特にハリバドラ）の論書に具体的に確認される。このような PYBhKrU の議論構成から、当時の修行論の傾向が窺われよう。

2. *Pāramitāyānabhāvanākramopadeśa 校訂テキスト 及び試訳

【 校訂テキスト及び試訳 】

§2.1.2.1. 三種類の誓願心

(C 74b7–75a3; D¹ 73b1–4; D² 166b1–4; G¹ 112a2–5; G² 237b6–238a4; N¹ 79b3–6; N² 187a7–187b3; P¹ 79b3–7; P² 196a6–196b2)

de la yang^{*1} 'di ltar blta^{*2} bar bya ste /

'dun pa'i^{*3} gnas skabs sogs^{*4} dbye bas // smon pa'i sems ni rnam pa gsum
//

'jug pa zhes ni bya ba'i sems // rnam pa bcu dgu dag tu 'dod // PYBhKrU
v.4 //

de la smon pa'i sems ni^{*5} rnam pa gsum du dbye ste / 'dun pa dang lhan cig
'dres pa'i chos thams cad mngon par byang chub par^{*6} 'dod pa'i mtshan nyid
can ni sa lta bu yin no // bsam pa dang (^{*7}lhan cig^{*7}) 'dres pa ni pha rol tu
phyin pa drug gi mtshan nyid de^{*8} / phyis 'byung ba dang da ltar gyi 'gyur ba
med pa'i phyir gser bzang po lta bu yin no // lhag pa'i sems dang 'dres pa ni
byang chub kyi phyogs kyi chos sum cu rtsa bdun bsgom par 'dod pa'i mtshan
nyid can de /^{*9} dkar po'i phyogs thams cad 'phel^{*10} bar 'dod pa'i tshul gyis zla
ba tshes pa^{*11} lta bu yin no //

<note> ^{*1}ang D². ^{*2}lta G¹,N¹,P¹. ^{*3}ba'i D². ^{*4}stsogs C,D¹. ^{*5}ni om.
C,D¹,D²,G¹,N¹,P¹. ^{*6}bar G. (^{*7}...^{*7})lhan cig tu G¹,N¹,P¹. ^{*8}do // G²,N²,P². ^{*9}des
C,D¹; te / D²,G²,N²,P². ^{*10}pal G¹. ^{*11}ba N².

また、それ（二十二種類の菩提心）⁽⁶⁾について、以下のように知られる
べきである。

意欲（*chanda）の状態等の区別によって誓願心は三種類であり⁽⁷⁾，
発趣という心であり，十九種類であると意図される。

それら（二十二種類の菩提心）のうち，誓願心は〔以下の〕三種類に区
別される。①意欲を伴った（*chandasaḥagata）〔誓願心〕は，〔仏の〕あ
らゆる特性の現等覺（*abhisambodhi）に対する願望を特徴とする。例え

ば、大地のようなものである（*pṛthivīsama）⁽⁸⁾。②意志（意樂）を伴った（*āśayasahagata）〔誓願心〕は、六波羅蜜を特徴とする⁽⁹⁾。なぜならば、未来と現在とにおいて変化しないからである。例えば、勝れた金のようなものである（*kalyāṇasuvārṇopama）⁽¹⁰⁾。③より優れた心（勝意樂）を伴った〔誓願心〕は、三十七菩提分法の修習に対する願望を特徴とする⁽¹¹⁾。なぜならば、あらゆる善品の増長を望むからである。たとえば新月のようなものである⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾

§2.1.2.2. 十九種類の発趣心

(C 75a3f.; D¹ 73b4f.; D² 166b4f.; G¹ 112a5–112b1; G² 238a4–6; N¹ 79b6–80a1; N² 187b3–5; P¹ 79b7–80a1; P² 196b2–4)

'jug pa'i sems kyi^{*1} dbye ba ni^{*2} rnam pa bcu dgu ste / sbyor ba dang 'dres pa gcig^{*3} dang / sbyin pa la sogs pa pha rol tu phyin pa bcu dang / mngon par shes pa dang ldan pa dang / bsod nams dang ye shes dang ldan pa dang / byang chub kyi phyogs dang ldan pa dang /^{*4} zhi gnas dang^{*5} lhag mthong dang ldan pa dang / gzungs dang spobs pa dang ldan pa dang / chos kyi skyed mos tshal dang ldan pa dang / bgrod pa gcig^{*6} pa'i lam dang ldan pa dang / chos kyi sku dang ldan pa'o //

<note> ^{*1}kyis G¹,N¹,P¹. ^{*2}ni om. G¹,N¹,P¹. ^{*3}cig G¹,N¹,P¹. ^{*4}/ om. G¹,N¹,P¹.

^{*5}dang / G¹,N¹. ^{*6}cig G¹,N¹,P¹.

発趣心の区別は、[以下の] 十九種類である。④加行を伴った（*prayogasahagata）〔発趣心〕が一つであり⁽¹⁴⁾，⑤ – ⑭布施等の十波羅蜜 [を伴った発趣心] ⁽¹⁵⁾と，⑮神通を伴った（*abhijñāśahagata）〔発趣心] ⁽¹⁶⁾と，⑯福德〔資糧〕と知〔資糧〕を伴った（*punyajñāśahagata）〔発趣心] ⁽¹⁷⁾と，⑰〔三十七〕菩提分法を伴った（*bodhipakṣasahagata）〔発趣心] ⁽¹⁸⁾と，⑱止と観とを伴った（*śamathavipaśyanāśahagata）〔発趣心] ⁽¹⁹⁾と，⑲総持弁才を伴った（*dhāraṇīpratibhāśahagata）〔発趣心] ⁽²⁰⁾と，⑳法印を伴った（*dharmaśāśahagata）〔発趣心] ⁽²¹⁾と，㉑一乗なる道を伴った（*ekāyanamārgasahagata）〔発趣心] ⁽²²⁾と，㉒法身を伴った（*dharmaśāśahagata）〔発趣心] ⁽²³⁾とである。⁽²⁴⁾

§2.2. 各菩提心と修行階梯

(C 75a4-6; D¹ 73b5-7; D² 166b6f.; G¹ 112b1-3; G² 238a6-238b2; N¹ 80a1-3; N² 187b5-7; P¹ 80a1-3; P² 196b4-6)

'di^{*1} yis de dag ma lus khyab // de bas gnas skabs rnam bzhi ste //

'bras bu rgyu dang sbyor sogs dang // lam gyi gnas skabs dbye bas so //
PYBhKrU v.5 //

de la^{*2} gsum ni las dang po pa'i gnas skabs so // bzhi pa^{*3} ni nges par 'byed
pa'i cha'i gnas skabs so // sbyin pa la sogs pa'i^{*4} pha rol tu phyin pa'i^{*5} sems
kyis^{*6} ni rgyu'i gnas skabs so // mngon par shes pa la sogs pa'i gnas skabs
dang^{*7} lhan cig gnas pa^{*8} brgyad kyis^{*9} ni 'bras bu'i gnas skabs khyab pa yin
no //

<note> ^{*1}de G²,N²,P². ^{*2}las D²,G²,N²,P². ^{*3}pas D². ^{*4}pa D². ^{*5}pa bcu'i
D²,G²,N²,P². ^{*6}kyis om. G¹,N¹,P¹. ^{*7}dang / G¹. ^{*8}pa'i D²,G²,N²,P². ^{*9}kyi
G¹,N¹,P¹.

これによって、それらすべては包摂される。それによる境地は四種類である。果と因と加行と初〔習業〕等の道の境地の区別に基づいて〔四種類〕である⁽²⁵⁾。

それら〔二十二種類の菩提心〕のうち、〔まず最初の〕三〔種類の誓願心〕は、初習業の境地（*ādikarmikāvasthā）である⁽²⁶⁾。第四（加行を伴う第一の発趣心）は、順決択分の境地（*nirvedhabhāgīyāvasthā）である⁽²⁷⁾。布施等の〔十〕波羅蜜〔を伴う、十種類の発趣〕心は、因の境地（*hetvavasthā）である⁽²⁸⁾。神通等の境地と共にある八〔種類の発趣心〕によって、果の境地（*phalāvasthā）は包摂される⁽²⁹⁾。⁽³⁰⁾

§2.3. 誓願心と発趣心の定義

(C 75a6-75b1; D¹ 73b7-74a2; D² 166b7-167a3; G¹ 112b3-6; G² 238b2-5; N¹ 80a3-5; N² 187b7-188a2; P¹ 80a3-6; P² 196b6f.)

de la dang po mgon po yis^{*1} // gsol ba'i rnam pa^{*2} yang dag bshad //

gnyis pa sbyin sogs la 'jug pa^{*3} // 'jug pa'i rnam pa^{*4} rab tu bsgrags^{*5} //
PYBhKrU v.6 //

gsol ba'i sems kyī^{*6} rnam pa ni^{*7} gsum ste /^{*8} de yang^{*9} sngar^{*10} bshad pa yin

no // 'jug pa'i nram pa ni gang nas brtsams te^{*11} / sdom pa 'dzin pa sngon du
'gro bas sbyin pa la sogs pa'i tshogs la ^(^{*12} 'jug pa ni^{*12}) 'jug pa'i sems so //
sdom pa^{*13} yang^{*14} bla ma sdom pa la gnas shing mkhas pa nus pa dang ldan
pa las blang bar bya'o // de med na sangs rgyas dang byang chub sems dpa'
nrams mdun du bzhugs par yid la byas la blang bar bya'o //

<note> ^{*1}yi G¹,N¹,P¹. ^{*2}par D²,G²,N²,P². ^{*3}pas G²,N²,P². ^{*4}par D²,G²,N²,P².

^{*5}bsgras G². ^{*6}kyi ni G²,P². ^{*7}ni om. G²,N²,P². ^{*8}ste C,D¹; te / G¹,P². ^{*9}'ang D².

^{*10}sngar om. G²,N²,P². ^{*11}brtsams te D²,G²,N²,P²; brtsams ste G¹; brtsam ste P¹.

(^{*12} . . . ^{*12}) 'jug pa de ni D²; 'jug pa ni om. G²,N²,P². ^{*13}pa la G²,N²,P². ^{*14}'ang D².

それらのうち、第一〔の誓願心〕は、保護者（＝仏）によって、希求を相とするものであると真に説かれた。第二は、布施等に対して発趣するものが、発趣を相とする〔心〕であると明らかに説かれた。希求する心の種類は三つである⁽³¹⁾。そして、そのことは以前に既に説かれている。発趣を相とする〔心〕とは、〔修行者が〕或るものに基づいて（*yataḥ prabhṛti），律儀の把持を先として（*saṃvaragrahaṇapūrvakam），布施等の資糧（*dānādisaṃbhāra）〔の獲得〕に対して向かう場合、〔その基づくところのものが〕発趣心である⁽³²⁾。また律儀は、律儀に身を置く、有能な善友から授けられるべきである。彼（善友）が居ない場合には、〔律儀は、〕諸仏・諸菩薩が現前にいらっしゃる、と作意して、授けられるべきである⁽³³⁾。⁽³⁴⁾

（未完）

—— 略号一覧 ——

【一次文献】

AA: Abhisamayālaṃkāra (Maitreya). See AAĀ. AAĀ: Abhisamayālaṃkāraloka (Haribhadra). *Abhisamayālaṃkāralokā Prajñāpāramitāvyaḥkā* (Commentary on *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā*) by Haribhadra. Together with the Text Commented on. Ed. Unrai Wogihara. Tokyo: The Toyobunko, 1932–1935. = D No. 3791; P No. 5189. AAKŚV: Abhisamayālaṃkārikārikāśāstravṛtti (Haribhadra). *A Study on the Abhisamaya-alaṃkāra-kārikā-śāstra-vṛtti*. Ed. Koei H. Amano. Yamaguchi: Rokoku Bunko, 2008. AAV: Abhisamayālaṃkāravṛtti (Āryavimuktisena). L'

Abhisamayālaṃkāravṛtti di Ārya-Vimuktisena: Primo Abhisamaya. Testo e note critiche. Ed. Corrado Pensa. Serie Proentale Roma XXXVII. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1967. **BCAP:** Bodhicaryāvatārapañjikā (Prajñākaramati). *Bodhicaryāvatārapañjikā: Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Śāntideva.* Ed. Louis de La Vallée Poussin. Calcutta: Asiatic Society, 1901–1914. **BhKr-I:** Bhāvanākrama-I (Kamalaśīla). *Minor Buddhist Texts, Part II, First Bhāvanākrama of Kamalaśīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary.* Ed. Giuseppe Tucci. Serie Orientale Roma IX, 2. Roma: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1958. = D No. 3915; P No. 5310. **MSA:** Mahāyānasūtrālaṃkāra (Maitreya). *Mahāyāna-Sūtrālaṃkāra: Exposé de la Doctrine du Grand Véhicule: Tome I Texte.* Ed. Sylvain Lévi. Paris: Librairie Honoré Champion, Éditeur, 1907 (repr. Kyoto: Rinsen Book Co., 1983). **MSAbh:** Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya (Vasubandhu). See MSA. **PPHT:** *Prajñāpāramitāhṛdayanāmaṭīkā (Kamalaśīla). P No. 5221. **PVSPrP:** Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā. *Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā I-I.* Ed. Takayasu Kimura. Tokyo: Sankibo Busshorin Publishing Co., Ltd., 2007. **PYBhKrU:** *Pāramitāyanābhāvanākramopadeśa (*Jñānakīrti). Cf. 佐藤 [2015]. **TAĀ:** *Tattvāvatārākyasakarasugatavācasamṣkṛtavyākhyāprakaraṇa (*Jñānakīrti). D No. 3709; P No. 4532. **TDṬ:** *Tattvadaśakaṭīkā (Sahajavajra). D No. 2254; P No. 3099.

【二次文献】

岩田 [2012]: 岩田孝「サハジャヴァジュラの波羅蜜理趣での修習論——『真実十偈釈』(Tattvadaśakaṭīkā) 和訳研究 (ad Tattvadaśaka 5d–6) ——」『伊藤瑞叡博士古稀記念論文集 法華仏教と関係諸文化の研究』山喜房仏書林。

佐藤 [2012a]: 佐藤晃「発趣心 (prasthānacitta) の定義をめぐる」『印度学仏教学研究』61(1)。 —— **[2012b]:** ——「カマラシーラ以降の修行論における菩提心の定義に関する一考察——特に発趣心 (prasthānacitta) の定義をめぐる——」『久遠研究論文集』3。 —— **[2015]:** ——「*Pāramitāyāna-bhāvanākramopadeśa 校訂テキスト及び試訳 (1)」『論叢アジアの文化と思

想』24. ツルティム・藤仲 [2005]: ケサン, ツルティム・藤仲孝司『チベット仏教の原典『菩提道次第論』悟りへの階梯』UNIO. 渡辺・高橋 [2016]: 渡辺章悟・高橋尚夫編『般若心経註釈集成 〈インド・チベット編〉』起心書房. Sparham [2006]: Sparham, Gareth. *Abhisamayālaṃkāra with Vṛtti and Āloka. Vṛtti by Ārya Vimuktisena. Āloka by Haribhadra. Volume One: First Abhisamaya*. Fremont: Jain publishing company. Wangchuk [2007]: Wangchuk, Dorji. *The Resolve to Become a Buddha: A Study of the Bodhicitta Concept in Indo-Tibetan Buddhism*. Studia Philologica Buddhica Monograph Series XXIII. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies of the International College for Postgraduate Buddhist Studies.

-
- (1) 発趣心の定義に関するカマラシーラとジュニャーナキールティの相違、及び思想的展開に関しては、佐藤 [2012a], [2012b]を参照。
- (2) 佐藤 [2015] 注 31 を参照。
- (3) 菩提心を二十二種類に分ける方法については、Wangchuk [2007] 273–275, 佐藤 [2015] 注 34 を参照。
- (4) ハリバドラは 8 世紀後半の人物と考えられ、PYBhKrU がベースとしている BhKr-I の著者カマラシーラとほぼ同年代の人物である。また、PYBhKrU は AA を引用するが、その AA の関連文献において各菩提心と修行階梯を対応付ける議論は、管見の限り、ハリバドラの AAĀ, *Abhisamayālaṃkāra-kārikāśāstravṛtti* (AAKŚV) に確認される。これらの点からジュニャーナキールティは、いずれも 8 世紀後半に著されたカマラシーラの BhKr-I とハリバドラの AAĀ 等を参照していたと推測する。
- (5) しかし、このことはカマラシーラが菩提心を二十二種類に分類する議論を知らないことを意味しない。彼の **Prajñāpāramitāhṛdayanāmaṭīkā* (PPHT) の中で以下のように確認される。Cf. PPHT P 331a4f.: de la rnam pa thams cad mkhyen pa nyid kyi sems bskyed pa nyi shu rtsa gnyis bstan pa tsam gyi . . . ; P 331b2; 331b4f. 翻訳については、渡辺・高橋 [2016] 59–67 を参照。
- (6) Cf. 佐藤 [2015] 14–16.
- (7) Cf. TTĀ D 60a1; P 66b1: smon pa'i sems kyi rnam pa gsum //.

(8) これ以降、各菩提心の解説が簡潔に示される。以下では参考のため、PYBhKrU が影響を受けたと考えられるハリバドラの AAĀ を挙げる。また、AAĀ は *Pañcaviṃśatisāhasrikā prajñāpāramitā* (PVSPPr) の理解を踏襲していると考えられるのでその箇所情報も挙げる。さらに、ハリバドラに先行するアールヤヴィムクティセーナ (ca. 6c.) の *Abhisamayālaṃkāravṛtti* (AAV) の箇所情報も合わせて提示することとする。また、AA に先行して、既に二十二種類の菩提心を説く *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (MSA) に対するヴァスバンドゥ (ca. 400–480) の註釈 *Mahāyānasūtrālaṃkārabhāṣya* (MSABh) の箇所情報を提示する。後者 MSABh については、その解釈が AAĀ と明らかに異なる場合にその点を注記する。Cf. AAĀ 25,14–16: *tatra prathamāḥ cittotpādaś chandasahagato bodhisattvānāṃ prthivīsamah sarvākārasarvadharmābhisambodhasya sambhāraprasavapratīṣṭhābhūtatvāt*^{*1} (= D 20a5f.; P 24b1f.: *de la byang chub sems dpa' rnam kyī sems bskyed pa dang po 'dun pa dang ldan pa ni sa dang 'dra ste / chos thams cad rnam pa thams cad du mngon par rdzogs par byang chub pa'i tshogs rab tu bskyed pa'i gzhiṛ gyur pa'i phyir ro //*) (^{*1}(bskyed pa'i) gzhiṛ Tib. *for °pratiṣṭhā°*) (それら [二十二種類の発心] のうち、諸菩薩における第一の発心は、意欲を伴ったものである。例えば、大地のようなものである。なぜならば、[その意欲を伴う発心は、] あらゆる在り方による [仏陀の] あらゆる特性の現等覚にとっての資糧の生起の基盤であるからである); PVSPPr 29,2–4; AAV 16,20–24; MSABh 16,17f. AAĀ の訳については Sparham [2006] 203 以下を適宜参照。AAĀ と MSABh とは、大地を喩例とする点で共通している。一方で、第一の発心が意欲 (chanda) を伴ったものであるという解説は MSABh には見られない。

(9) Cf. TTĀ D 60a2; P 66b3: *pha rol tu phyin pa drug gi spyod pa'i mtshan nyid de //*.

(10) Cf. AAĀ 25,16–18: *dvitīya āśayasahagataḥ kalyāṇasuvarṇopamaḥ śaṭpāramitāsamgrhītasya hitasukhāśayasyāyatitadātvayor vikārābhajanād āsamyak-sambodhiḥ śaya āśaya*^{*1} *iti kṛtvā* (= D 20a6f.; P 24b2f.: *gnyis pa bsam pa (D; bsam pa om. P) dang ldan pa ni gser bzang po lta bu yin te / pha rol tu phyin pa drug gis bsod pa (P; bstan pa'i D) tshe 'di dang phyi ma dag la phan pa dang bde ba'i bsam pa ni yang dag par rdzogs pa'i byang chub kyī bar du 'gyur ba med pa'i phyir te / gnas pa (P; pas D) na bsam pa zhes bya ba'i tshul gyis so //*) (^{*1}gnas pa

na bsam pa Tib. *for* āsamyakṣaṃbodhiḥ śaya āśaya) (第二の〔発心〕は、意志を伴った〔発心〕である。例えば、勝れた金のようなものである。なぜならば、六波羅蜜によって集められた利益や楽に対する意志は、未来と現在の両方において変化することを離れているからである。意志とは、完全なる悟りに対する (ā) 基盤 (śaya) という意味である); MSABh 16,18f.; PVSPPr 29,5–10; AAV 16,24–17,3.

(11) Cf. TTĀ D 60a3; P 66b3f.: byang chub kyi sems chos sum cu rtsa bdun sgom bar 'dod pa'i mtshan nyid can ni . . .

(12) Cf. AAĀ 25,18f.: tr̥tīyo 'dhyāśayasahagataḥ śuklapakṣanavacandropamaḥ, sarvaśuklapakṣadharmottarottaravivṛddhigamanena^{*1}, adhika āśayo 'dhyāśaya iti kṛtvā (= D 20a7–20b1; P 24b4f.: gsum pa lhag pa'i bsam pa dang ldan pa ni dkar po'i phyogs kyi zla ba tshes pa lta bu yin te / dge ba'i chos thams cad gong nas gong du rnam par 'phel bar 'gyur ba'i phyir te / bsam pa lhag pas na (P; bsam pa lhag pas na *om*. D) lhag pa'i bsam pa zhes bya ba'i tshul gyis so //) (^{*1}dge ba'i chos thams cad Tib. *for* sarvaśuklapakṣa^o) (第三〔の誓願心〕は、優れた意志を伴ったものである。例えば、白品の新月の如きものである。なぜならば、あらゆる善法を益々増長するに至るからである。優れた意志とは、一層優れた (adhika) 意志 (āśaya) という意味である); MSABh 16,19f.; PVPrP 29,11–30,12; AAV 17,3–9. AAĀ で説かれる第三の誓願心と MSABh で説かれる第三の発心はいずれも、それによって善法の増長する様が白品の新月 (śuklapakṣanavacandra), すなわち、満月に向け満ちていく新月に喩えられる。しかし、前者は優れた意志を伴ったもの (adhyāśayasahagata) とし、後者は加行を伴った (prayogasahagata) 発心とする点で異なる。

(13) Cf. TTĀ D 60a1–4; P 66b1–4.

(14) Cf. AAĀ 25,21–24: caturthaḥ prayogasahagato jvalanopamaḥ. trisarvajñātā-prayogasyendhanāntaraviśeṣeṇvāgner uttarottaraviśeṣagamanāt. prakṛṣṭo yogaḥ prayoga iti kṛtvā. ayaṃ ca prathamabhūmipraveśaprayogamārgasamgrhīto 'dhimukticaryābhūmipratibaddhaḥ (= D 20b1f.; P 24b5–7: bzhi pa sbyor ba dang ldan pa ni me lta bu ste / thams cad mkhyen pa nyid gsum gyi sbyor ba ni shing gzhan gyis me khyad par du 'gyur ba dang 'dra bar gong nas gong du 'gro ba'i phyir te / (P; / *om*. D) mchog tu gyur pa'i sbyor ba yin pa'i phyir rab tu sbyor ba zhes bya ba'i tshul gyis so // 'di ni sa dang po la 'jug pa'i sbyor ba'i lam gyis bsdu pa mos

pas spyod pa'i sa dang 'brel pa yin no //) (第四 [の菩提心] は、加行を伴ったものである。例えば火の如きものである。なぜならば、三種の一切知者性に対する加行は、あたかも優れた薪との近接により火が [益々盛んになるが] ごとく、益々殊勝なる [状態] を得るからである。加行とは、増長されたヨーガということである。そして、こ [の第四の菩提心] は、初地に悟入する加行道に収められ、信解行地と結び付けられる); MSABh 16,20f.; PVSPPrP 30,13–24; AAV 17,9–15. PYBhKrU, AAĀ 等において第四の菩提心は加行と結びつくと言明されるが、MSABh では優れた意志を伴ったもの (adhyāśayasahagata) と説明される。PYBhKrU や AAĀ 等では、第三番目の菩提心がそれを伴うとされる。第四の菩提心に関して、火 (jvalana (AAĀ), vahni (MSABh)) を喩例として提示する点は共通している。

(15) Cf. TAA D 60a4; P 66b5: sbyin pa la sogs pa'i pha rol tu phyin pa bcu dang /. 第五の、布施波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 25,24–26: pañcamo dānapāramitāsahagato mahānidhānopamaḥ sarvathāmiśasambhogenāprameyasattvasaṃtarpaṇe 'py aparyādānāt (= D 20b2f.; P 24b7f.: lnga pa sbyin pa'i pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni gter chen po dang 'dra ste / zad zing gi longs spyod kyis rnam pa thams cad du tshad med pa'i sems can rnam yang dag par tshim par byed kyang mthar thug pa med pa'i phyir ro //) (第五 [の菩提心] は、布施波羅蜜を伴ったものである。例えば大きな貯蔵庫のようなものである。なぜならば、[その第五の菩提心は、] あらゆる在り方で食べ物を享受させることを通して、無量の有情を満足させたとしても、尽きることが無いからである); MSABh 16,21f.; PVSPPrP 30,25–29; AAV 17,16–20. 次の第六の、持戒波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 25,26f.: śaṣṭhaḥ śīlapāramitāsahagato ratnākaroḥ sarvaguṇaratnānām āśrayabhāvena tataḥ prasavaṇāt (= D 20b3; P 24b8–25a1: drug pa tshul khrims kyis pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni rin po che'i 'byung gnas dang 'dra ste / rten gyi ngo bo nyid kyis yon tan rin po che thams cad de las skyeba yin pa'i phyir ro //) (第六 [の菩提心] は、持戒波羅蜜を伴ったものである。例えば宝蔵のようなものである。なぜならば、[その第六の菩提心は、] 宝のごときあらゆる功德の拠り所となって、そこから [あらゆる功德を] 生み出すからである); MSABh 16,23; PVSPPrP 31,1–4; AAV 17,20–25. 第七の、忍辱波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ

25,27f.: *saptamaḥ kṣāntipāramitāsahagato mahārṇavopamaḥ sarvāṇiṣṭopanipātair akṣobhyatvāt* (= D 20b3f.; P 25a1f.: *bdun pa bzod pa'i pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni rgya mtsho chen po dang 'dra ste / mi 'dod pa thog tu bab pa thams cad kyis mi 'khrugs* (D; 'khrug P) *pa'i phyir ro //*) (第七 [の菩提心] は、忍辱波羅蜜を伴ったものである。例えば大海のようなものである。なぜならば、[その第七の菩提心は、] あらゆる意図されない出来事によってかき混ぜられないからである); MSABh 16,23f.; PVSPrP 31,5–9; AAV 17,25–18,3. 第八の、精進波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 25,28f.: *aṣṭamo vīryapāramitāsahagato vajropamaḥ sampratyaṣṭyadārdhyenābhedyatvāt* (= D 20b4; P 25a1: *brgyad pa brtson 'grus kyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni rdo rje lta bu ste / yid ches pa brtan pas mi phyed pa'i phyir ro //*) (第八 [の菩提心] は、精進波羅蜜を伴ったものである。例えば、金剛のようなものである。なぜならば、[その第八の菩提心は、] 堅固な信によって、分断されないからである); MSABh 16,24f.; PVSPrP 31,10–13; AAV 18,3–7. 第九の、禪定波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 25,30f.: *navamo dhyānapāramitāsahagataḥ parvatopamaḥ sarvathālabhanavikṣeṣeṇa niṣkampyatvāt* (= D 20b4f.; P 25a2f.: *dgu pa bsam gtan gyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni ri'i rgyal po lta bu ste / dmigs pa'i rnam par g-yeng bas rnam pa thams cad du bskyod par mi nus pa'i phyir ro //*) (第九 [の菩提心] は、禪定波羅蜜を伴ったものである。例えば、山のようなものである。なぜならば、[その第九の菩提心は、] あらゆる在り方での対象に対する放逸によって掻き乱されないからである); MSABh 16,25f.; PVSPrP 31,14–18; AAV 18,7–12. 第十の、智慧波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 25,31–26,1: *daśamaḥ prajñāpāramitāsahagato mahābhaisajyopamaḥ sarvakleśajñeyāvaraṇavyādhipraśamanāt* (= D 20b5f.; P 25a3f.: *bcu pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni sman chen po lta bu ste / nyon mongs pa dang shes bya'i sgrib pa'i nad thams cad rab tu zhi bar byed pa'i phyir ro //*) (第十 [の菩提心] は、智慧波羅蜜を伴ったものである。例えば、薬のようなものである。なぜならば、[その第十の菩提心は、] あらゆる煩惱 [障] と所知障に基づく病を完全に鎮めるからである); MSABh 16,26f.; PVSPrP 31,19–23; AAV 18,12–17. 第十一の、方便波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,1f.: *ekadaśa upāyakaūśalapāramitāsahagataḥ kalyāṇamitro-*

pamaḥ sarvāvasthāsattvārthāparityāgāt (= D 20b6; P 25a4f.: bcu gcig pa thabs kyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni dge ba'i bshes gnyen lta bu ste / gnas skabs thams cad du sems can gyi don yongs su mi gtong ba'i phyir ro //) (第十一 [の菩提心] は, [善巧] 方便波羅蜜を伴ったものである。例えば, 良き友人のようなものである。なぜならば, [その第十一の菩提心は,] あらゆる立場の有情の利益に関して無関心ではないからである); MSABh 16,27f.; PVSPrP 31,24–32,11; AAV 18,17–19,3. 第五から第十の菩提心が六波羅蜜と対応している点は AAĀ 等と MSABh に共通している。しかし AAĀ 等は十波羅蜜を採用しているので, この第十一から第十四の菩提心が何を伴うものかという点で MSABh と異なる。MSABh では四無量を伴うもの (apramāṇasahagata) とされる。第十二の, 願波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,2–4: dvadaśaḥ praṇidhānapāramitāsahagataś cintāmanisa-dṛśo yathāpraṇidhānam phalasamṛddheḥ (= D 20b6f.; P 25a5: bcu gnyis pa smon lam gyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni yid bzhin gyi nor bu dang 'dra ste / ji ltar smon pa'i 'bras bu 'grub pa'i phyir ro //) (第十二 [の菩提心] は, 願波羅蜜を伴ったものである。例えば, 如意珠のようなものである。なぜならば, [その第十二の菩提心は,] 願いのままに, [その] 果報を成就するからである); MSABh 16,28; PVSPrP 32,12–28; AAV 19,4–8. MSABh では四神通を伴ったもの (abhijñāsahagata) とされる。第十三の, 力波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,4f.: trayodaśo balapāramitāsahagata ādityopamo vineyasasya paripācanāt (= D 20b7; P 25a5f.: bcu gsum pa stobs kyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni nyi ma lta bu ste / gdul bya'i lo tog yongs su smin par byed pa'i phyir ro //) (第十三 [の菩提心] は, 力波羅蜜を伴ったものである。例えば, 太陽のようなものである。なぜならば, [その第十三の菩提心は,] 所化という穀物を成熟させるものだからである); MSABh 16,29; PVSPrP 32,29–33,15; AAV 19,8–11. MSABh では四摂事を伴ったもの (saṃgrahavastusahagata) とされる。第十四の, 智波羅蜜と結び付いた菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,5–7: caturdaśo jñānapāramitāsahagato madhurasamgītiḥoṣopamo vineyāvarjanavaradharmadeśakatvāt (= D 20b7–21a1; P 25a6f.: bcu bzhi pa ye shes kyi pha rol tu phyin pa dang ldan pa ni glu snyan pa sgrogs pa dang 'dra ste / gdul bya 'dun par byed pa'i chos ston par byed pa yin pa'i phyir ro //) (第十四 [の菩提心] は, 知波羅蜜を伴ったもの

である。例えば、甘美なる音楽の音色のようなものである。なぜならば、
[その第十四の菩提心は、] 所化を勝れた行いへと導くものであるからである); MSABh 16,29f.; PVSPrP 33,16–35,23; AAV 19,12–19. MSABh では法無碍等の四無碍解を伴うもの (pratisaṃvitsahagata) とされる。

(16) 第十五の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,7f.: pañcadaśo 'bhijñāsaḥagato mahārājopamo 'vyāhataprabhāvatvena parārthānuṣṭhānāt (= D 21a1f.; P 25a7f.: bco lnga ba mngon par shes pa (D; ba P) dang ldan pa ni rgyal po chen po lta bu yin te / mthu thogs pa med par gzhan gyi don sgrub pa yin pa'i phyir ro //) (第十五 [の菩提心] は、神通を伴ったものである。例えば、大王のようなものである。[その第十五の菩提心は、] 壊れることのない力を有することによって、他者のために実践するものであるからである); MSABh 16,30f.; PVSPrP 35,24–36,28; AAV 19,19–20,9. MSABh では、依義不依文等の四依を伴うもの (pratisaraṇasahagata) とされる。

(17) 第十六の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,8–10: ṣoḍaśaḥ puṇyajñānasambhārasahagataḥ koṣṭhāgāropamo bahupuṇyajñānasambhāraśaṣṭhānatvāt (= D 21a2; P 25a8–25b1: bcu drug pa bsod nams dang ye shes kyi tshogs dang ldan pa ni bang mdzod lta bu ste / bsod nams dang ye shes kyi tshogs mang po'i (D; po P) mdzod lta bu yin pa'i phyir ro //) (第十六 [の菩提心] は、福德 [資糧] と知資糧を伴ったものである。例えば、宝庫のようなものである。なぜならば、[その第十六の菩提心は、] 多くの福德 [資糧] と知 [資糧] の宝蔵としてあるからである); MSABh 16,31f.; PVSPrP 36,29–37,28; AAV 20,9–14.

(18) 第十七の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,10f.: saptadaśo bodhipakṣadharmaśahagato^{*1} mahāmārgopamaḥ sarvāryapudgalayānānuyātātāt (= D 21a2f.; P 25b1f.: bcu bdun pa byang chub kyi phyogs dang mthun pa'i chos sum cu rtša bdun dang ldan pa ni lam chen po lta bu ste / 'phags pa'i gang zag thams cad gshegs shing rjes su gshegs pa yin pa'i phyir ro //) (*¹byang chub kyi phyogs dang mthun pa'i chos sum cu rtša bdun dang ldan pa Tib. *for* bodhipakṣadharmaśahagato) (第十七 [の菩提心] は、[三十七] 菩提分法を伴ったものである。例えば、大道のようなものである。なぜならば、あらゆる聖人達の乗物が随行するからである); MSABh 16,32–17,1; PVSPrP 37,20–28; AAV 20,14–19.

(19) 第十八の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,11f.: *aṣṭādaśaḥ śamathavipaśyanāsahagato yānopamo yuganaddhavāhitvāt saṃsāranirvāṇānyatarāpātena sukhasaṃvahanāt* (= D 21a3f.; P 25b2f.: *bco brgyad pa zhi gnas dang lhag mthong dang ldan pa ni bzhon* (D; *gzhon* P) *pa lta bu ste / zung 'jug tu 'gro bas na* (D; *na / P*) *'khor ba dang mya ngan las 'das pa gang du yang mi lhung bas bde blag tu 'gro ba'i phyir ro //*) (第十八 [の菩提心] は、止と観とを伴うものである。例えば、乗物のようなものである。なぜならば、[それら止と観とを] 一組として進むがゆえに、輪廻と解脱の [どちらか] 一方に陥ること無く、楽を運ぶものであるからである); MSABh 17,1; PVSPrP 37,29–40,10; AAV 20,19–28.

(20) 第十九の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,13–15: *ekonaviṃśatitamo dhāraṇīpratibhānasahagataḥ prasaravaṇopamaḥ sarvathodakadhāraṇākṣayodbhedasādharmyeṇa śrūtāśrutadharmadhāraṇād*^{*1} *aparyāttadeśanodbhedaṭvāt* (= D 20b4f.; P 25b3f.: *bcu dgu pa gzungs dang spobs pa dang* (P; *dang om*. D) *ldan pa ni bkod ma'i chu dang 'dra ste / rnam pa thams cad du chu 'dzin par byed cing mi zad par 'byin pa dang 'dra bar thos pa dang ma thos pa'i chos 'dzin pa dang bstan pa mthar thug* (D; *thugs* P) *pa med par 'byin pa'i phyir ro //*) (*¹*'dzin pa dang Tib. for °dhāraṇād*) (第十九 [の菩提心] は、総持弁才を伴ったものである。例えば、泉のようなものである。なぜならば、[泉が] あらゆる在り方で水を保って、尽きること無く吹き出しているのに似て、既に聞かれた [法] と未だ聞かれていない法を保持することから、尽きることの無い教説を説示するからである); MSABh 17,2f.; PVSPrP 40,11–42,7; AAV 20,28–21,8.

(21) 第二十の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,15–17: *viṃśatitamo dharmoddānasahagata ānandaśabdopamo mokṣakāmānām vineyānām priyaśrāvaṇāt* (= D 21a5; P 25b5: *nyi shu pa chos kyi dga' ston dang ldan pa ni sgra snyan pa lta bu ste / thar pa 'dod pa'i gdul bya rnams la snyan par sgrogs pa'i phyir ro //*) (第二十 [の菩提心] は、法印を伴ったものである。例えば、歓喜の言葉のようなものである。なぜならば、解脱を求める所化達にとって好ましく聞かれるものであるからである); MSABh 17,3–4; PVSPrP 42,8–44,22; AAV 21,8–17.

(22) 第二十一の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,18–20:

ekaviṃśatitama ekāyanamārgasahagato nadīśrotahsadrśo jñānajñeyayoh samatādhigamenorukaruṇāprajñopāyatayā 'sambhinnaparakāryakriyātvāt'^{*1} (= D 21a6f.; P 25b6f.: nyi shu rtse gcig pa bgrod pa gcig pa'i lam dang ldan pa ni (D; pa'i P) chu bo'i rgyun dang 'dra ste / shes pa dang shes par bya ba (shes par bya ba D; shes bya P) mnyam pa nyid du rtogs pas snying rje chen po dang thabs dang shes rab kyi rgyun mi 'chad par gzhan gyi don byed pa nyid yin pa'i phyir ro //) (^{*1}gzhan gyi don Tib. *for* °parakārya°) (第二十一 [の菩提心] は、一乗なる道を伴ったものである。例えば、川の流れのようなものである。なぜならば、知と所知の両者は等しいという証得により、大悲と智慧と方便として、区別されない他者のために作用するからである); MSABh 17,4–6; PVSPPrP 44, 23–49,10; AAV 21,17–22,4.

(23) 第二十二の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,21–25: dvāviṃśatitamo dharmakāyasahagato mahāmeghopamas tuṣṭabhavanavāsādisattvārthasamdarśanena^{*1} nirmāṇakāyatayā sarvasattvārthakriyāṇām tadadhīnatvāt (= D 20a7–21b1; P 25b7f.: nyi shu rtse gnyis pa chos kyi sku dang ldan pa ni sprin chen po lta bu ste / sprul pa'i skus dga' ldan gyi gnas na bzhugs pa la sogs pa kun tu ston pas sems can gyi don bya ba thams cad de la rag lus (D; las P) pa'i phyir ro //) (^{*1}sattvārtha° om. Tib.) (第二十二 [の菩提心] は、法身を伴ったものである。例えば、大きな雲のようなものである。なぜならば、兜率天宮に住すること等を有情のために示現することにより、化身として、あらゆる有情のために行いを為すことは、それ(第二十二の菩提心)を拠り所とするからである); MSABh 17,6–8; PVSPPrP 49,11–53,8; AAV 22,4–8. MSABh では、善巧方便を伴うもの (upāyakaṣālyasahagata) とされる。

(24) Cf. TTĀ D 60a4f.; P 66b4–6.

(25) 同様の記述は、サハジャヴァジュラの *Tattvadaśakaṭikā* (TDT) にも確認される。Cf. TDT D 171b2; P 187b4: mtha' dag la ni gnyis kyis khyab // de las gnas skabs rnam pa bzhi // 'bras bu rgyu sbyor dang po yi // lam gyi gnas skabs tha das pas // 岩田 [2013] 771b1–4 に和訳研究あり。

(26) この点は、AAĀ に既に見られる。Cf. AAĀ 25,20f.: ete ca trayo mṛdumadhyādhimātratayādikarmikasambhārabhūmisamgrhītāḥ (= D 20b1; P 24b5: gsum po 'di dag ni chung ngu dang 'bring dang chen po nyid kyis las dang po pa tshogs kyi sas bsdu pa yin no //) (そして、それら [、意欲、意志、優れた意志を伴

った] 三[種類の発心]は、[それぞれ] 下と中と上なるものとして、初習業なる資糧地に収められる); AAKŚV 24,20.

(27) Cf. AAĀ 25,23f.: *ayaṃ ca prathamabhūmipraveśaprayogamārgasaṃgrhīto*^{*1} 'dhimukticyābhūmipratibaddhaḥ (= D 20b2; P 24b7: 'di ni sa dang po la 'jug pa'i sbyor ba'i lam gyis bsdu pa mos pas spyod pa'i sa dang 'brel pa yin no //) (^{*1}°mārgasaṃgrhīto *em.* [lam gyis bsdu pa Tib.] °mārgasaṃgrhīto AAĀ) (そして、これ(加行と結び付く第四の発心)は、初地に入るための加行道に収められるもので、信解行地に結び付けられる); AAKŚV 24,21f.

(28) Cf. AAĀ 26,6f.: *ete ca daśa yathākramaṃ pramuditādidāśabhūmisamgrhītā darśanabhāvanāmārgagocarāḥ* (= D 21a1; P 25a7: *bcu po 'di dag ni go rims* (D; rim P) *bzhin du rab tu dga' ba la sogs pa'i sa bcus bsdu te /* (D; / *om.* P) *mthong ba dang bsgom* (D; sgom P) *pa'i lam gyi sbyod yul can yin no //*) (そして、これら十[種類の発心](十波羅蜜それぞれと結び付く第五以下の十種類の発心)は、順に、歓喜(*pramudita*) [地]を始めとする十地に収められるもので、見[道]と修道における行境を有するものである); AAKŚV 24,23f.

(29) AAĀ では第十五から第十九までの五種類について次のように述べられる。Cf. AAĀ 26,15: *ete ca pañca bodhisattvabhūmiṣu viśeṣamārgasaṃgrhītāḥ* (= D 21a5; P 25b4f.: *lga po 'di dag ni byang chub sems dpa'i sa las khyad par gyi lam gyis bsdu pa yin no //*) (そして、これら[神通、福と智の二資糧、止観、総持弁才とそれぞれ結び付く第十五以下の] 五[種類の発心]は、諸々の菩薩地における勝進道に収められる); AAKŚV 24,25. 第二十の菩提心については、次のように述べられる。Cf. AAĀ 26,17f.: *ayaṃ ca buddhabhūmipraveśaprayogamārgasaṃgrhīto bodhisattvabhūmipratibaddhaḥ* (= D 21a5f.; P 25b5f.: 'di ni byang chub sems dpa'i sa dang 'brel pa sangs rgyas kyi sa la 'jug pa'i sbyor ba'i lam gyis bsdu pa yin no //) (そして、これ(法印と結び付く第二十の発心)は、菩薩地に結び付けられ、仏地に入るための加行道に収められる); AAKŚV 24,26f. 第二十一の菩提心については次のように述べられる。Cf. AAĀ 26,20: *ayaṃ ca buddhabhūmisamgrhīto maulāvasthāprāptaḥ* (= D 21a7; P 25b7: 'di ni sangs rgyas kyi sas bsdu pa'i dngos gzhi'i gnas skabs thob pa yin no //) (そして、これ(一乗なる道と結び付く第二十一の発心)は、根本的境地に達したもので、仏地に収められる); AAKŚV 24,28. 第二十二の菩提心については以下の通りである。Cf. AAĀ 26,23–25: *ayaṃ api nirvikalpatathāgatādhipatyapravṛttanirmāṇādyupalabdher vineyaparikalpitaśuddhalaukikapṛṣṭhāvasthāprā-*

pto buddhabhūmisamgrhītaḥ (= D 21b1f.; P 25b8–26a2: 'di yang de bzhin gshegs pa nam par mi rtog pa'i bdag po las zhus pas 'dul (zhus pas 'dul D; zhugs pa gdul P) byas yongs su brtags pa'i sprul pa la sogs pa dmigs pa yin pa'i phyir / (D; / om. P) dag pa 'jig rten pa'i ye shes kyi rjes la thob pa'i sangs rgyas kyi sas bsduḥ pa yin no //) (これ（法身と結び付く第二十二の発心）も、無分別なる如来の力によって発せられた変化等の認識から、弟子によって構想分別された清浄世間〔智〕に続く境地に達したものであり、仏地に収められるものである); AAKŚV 24,29f. ハリバドラは、果位の中を菩薩と仏それぞれに関連付けてさらに分類している。この点は PYBhKrU には示されない。

(30) Cf. TTĀ D 60a5–7; P 66b6–67a1.

(31) Cf. TTĀ D 60b1; P 67a1f.: gsol ba'i nam pa smon pa'i sems ni nam pa gsum ste /.

(32) Cf. BhKr-I 193,3–5: yataḥ prabhṛti samvaragrahaṇe pravartamānāḥ^{*1} sam-bhāreṣu drśyante^{*2} tat prasthānacittam (= D 25a4; P 25b5f.: gang phan chad sdom pa bzung ste tshogs rnam la zhugs pa de ni zhugs pa'i sems so //) (*¹pravartamānāḥ conj. [Cf. BCAP 24,7: sambhāreṣu pravartate] ^(sic) . . . vartamānāḥ.^{*2}drśyante om. Tib.).

(33) Cf. BhKr-I 193,5–9: samvaraś ca vijñātapratibalasamvarasthitāt kalyāṇamitrāt purato^{*1} grāhyaḥ. asati pratirūpe grāhake^{*2} buddhabodhisattvān āmukhīkṛtya yathā mañjuśrīyā 'mbararājabhūtena bodhicittam utpāditam tathotpādanīyaḥ (= D 25a4f.; P 25b6f.: sdom pa ni pha rol po mkhas pa mthu dang ldan pa sdom pa la gnas pa las mnod do // mthun pa med na sangs rgyas dang byang chub sems dpa' rnam mngon du byas la / (D; / om. P) 'phags pa 'jam dpal rgyal po nam mkha' zhes bya bar gyur pa na byang chub tu sems bskyed pa de bzhin du bskyed par bya'o //) (*¹pha rol po mkhas pa mthu dang ldan pa sdom pa la gnas pa las Tib. for vijñāta-pratibalasamvarasthitāt kalyāṇamitrāt purato. ^{*2}mthun pa med na Tib. for asati pratirūpe grāhake) (そして、戒律は、高名にして有能な戒律に身を置く善友から、面前で受持されるべきである。〔戒律を〕授けるに相応しい人がいないときには、あたかも文殊師利が虚空界の王であったときに菩提心を生じたように、そのように仏、菩薩を現前にして〔発趣心を〕生じさせるべきである)。

(34) Cf. TTĀ D 60a7–60b2; P 67a1–4.